

高校生や医学生対象に体験会

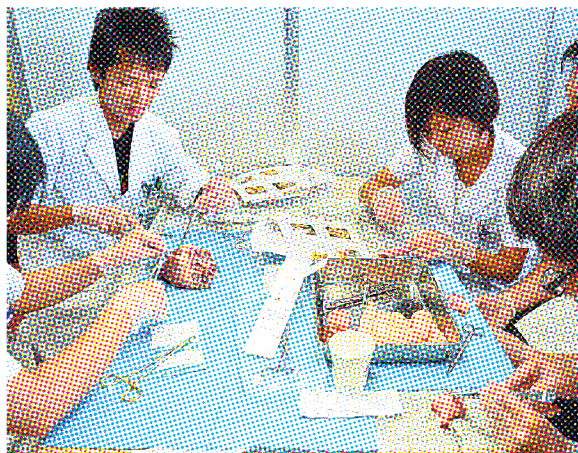
外科医の魅力知って

医療を扱う映画やドラマの「主役」を担うことが多い外科医。だが、現実の医療現場では、医療事故のリスクや拘束時間の長さを考慮して、外科を選択しない研修医が増えている。医師を志望する若者に、命を救う醍醐味にあふれた外科の魅力を伝え、進路を選んでもらうという取り組みが、鹿児島県内でも始まっている。

(西元貴子)



①最新の医療機器を使って手術の模擬体験をする高校生—鹿児島市の鹿児島大学病院
②豚の心臓を使い、縫合のトレーニングをする学生—鹿児島市の鹿児島大学桜ヶ丘キャンパス



鹿 県 内

メーカーが2年前から開いている。

◆◆◆
県内10高校から27人が参加。高校生は、本物の手術室、器材を使った模擬手術体験に臨んだ。鶏肉や豚肉で超音波メスの使い心地を試した池田高校3年の東祐志君(17)は、「最新の医療機器の技術に驚いた。あらためて外科医になりたいと思った」と話す。

志望者減に現場危機感

同科のホームページでは、外科医の仕事や魅力をイラスト入りで紹介したショートストリー「ゲカイチ」や教室案内の動画を掲載。学部外の人に魅力を発信している。

医学部の内部から外科志望を掘り起こす取り組みも始まった。

同大の心臓血管外科は、医学部生や研修医を対象に、「心臓血管ウエットラボ」を開いている。

心臓の手術は重症度、緊急性が高く、手術の結果が生死に直結する。術後の管理にも時間を要するため長時間拘束されるなど、「ハードル」が高い。

豚の心臓を使い、解剖や血管の縫合を体験してもらうラボは、手術の「ハードル」を低くして、外科の面白さ、やりがい気付いてもらう狙いがある。

同科は8月下旬に同大医学部5年生を対象にウエットラボを開催。参加した野中裕斗さん(22)は「手術は見学することが多いので、実際の縫合は貴重な体験だった」と感想を語った。

◆◆◆
鹿児島県内の診療科別医師

人の命救う醍醐味伝達

数の推移を見ると、2010年の外科医数は334人。00年から56人も減った。減少の理由に挙げられるのが、過酷な勤務実態と、医療事故の訴訟リスクだ。

日本外科学会(東京)が実施した外科医の労働環境に関するアンケート調査によると、外科医の1週間あたり労働時間数は平均78・5時間。月に平均2・4回の当直があり、当直以外で緊急に呼び出されることも月2・2回あった。また、当直明けの手術が、「いつもある」と回答した人が36%、「しばしばある」が25%、「まれにある」が13%に上った。

「医療訴訟リスクが治療の選択・実施に影響したと感じたことがあるか」との問いに対して、「たまにある」が37%、「しばしばある」が25%、「常にある」が23%と、8割以上が影響を認めている。

心臓血管外科の井本浩教授は、「外科医を取り巻く環境は大変厳しいが、自分の施術で人の命を救うことができるやりがいを現場から積極的に発信していくことで、一人でも多くの志望者を確保していきたい」と語った。